commentarii de belli gradalis e principium

Fate/hollow ataraxia 二次創作小説

tonight, let us end our avenge. tonight, let us avenge, hollow ataraxia.

preface: "the avenge wars" ii

prologue: "20 seconds" 01

1: "the avenger".....08

2: "for them the bell tolls" 19

3: "world without end, Amen."..... 33

Hollow/avenge night

ホロウ　アヴェンジナイト

wei-luxin

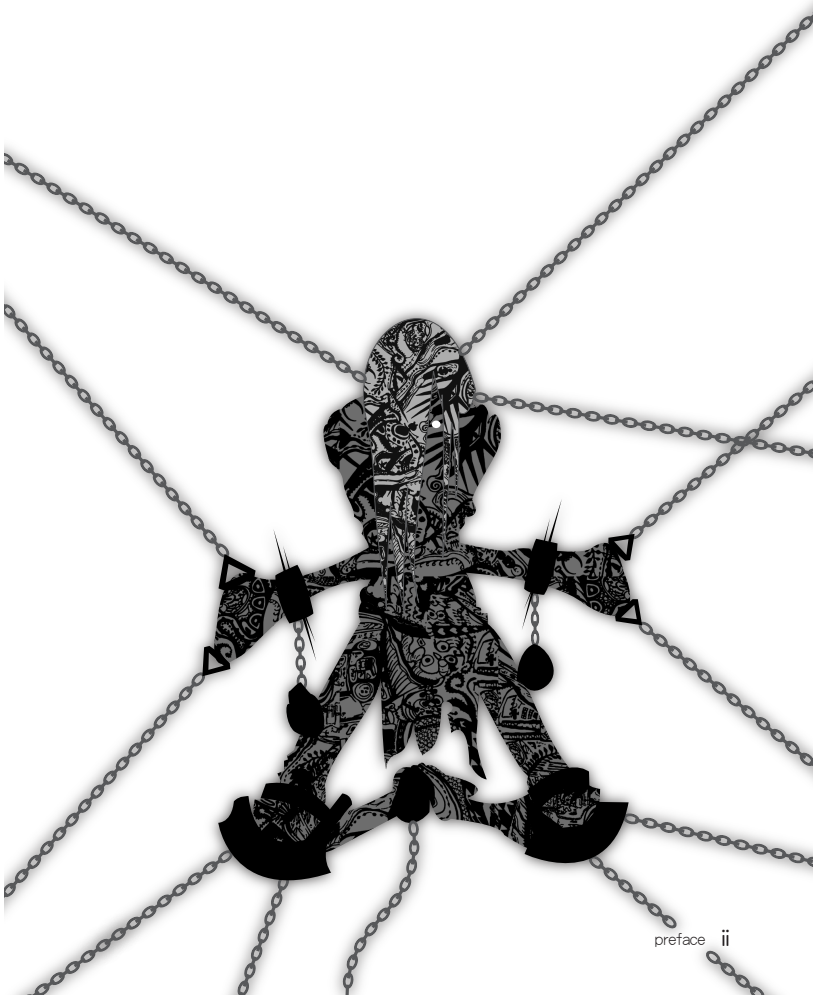
維　如　星

Wei Luxin and Machina Ex Deo Present...

初めましての方も、お久しぶりの方も、こんにちは。
「神慮の機械（マキーナ・エクス・デオ）」二次創作物書き、維如星（ウェイ・ルーシン）と申します。
この度は拙作“Hollow/avenge night”をお手に取っていただき、誠にありがとうございました。
Fateシリーズ四作目となる本書は、原作のhollowに近い短編仕立てとなっております。
バゼット、アンリ＆士郎、凛＆アーチャー、桜＆ライダー、キャスター＆葛木と、ホロウの主要キャラが幅広く登場。
それぞれの視点からの「聖杯戦争」を描きました。

願わくば、本書にてFate/hollow ataraxiaの世界を皆様にお楽しみいただければ幸いです。

今から十年前———
最悪の魔を巡る歪んだ戦争が始まった。

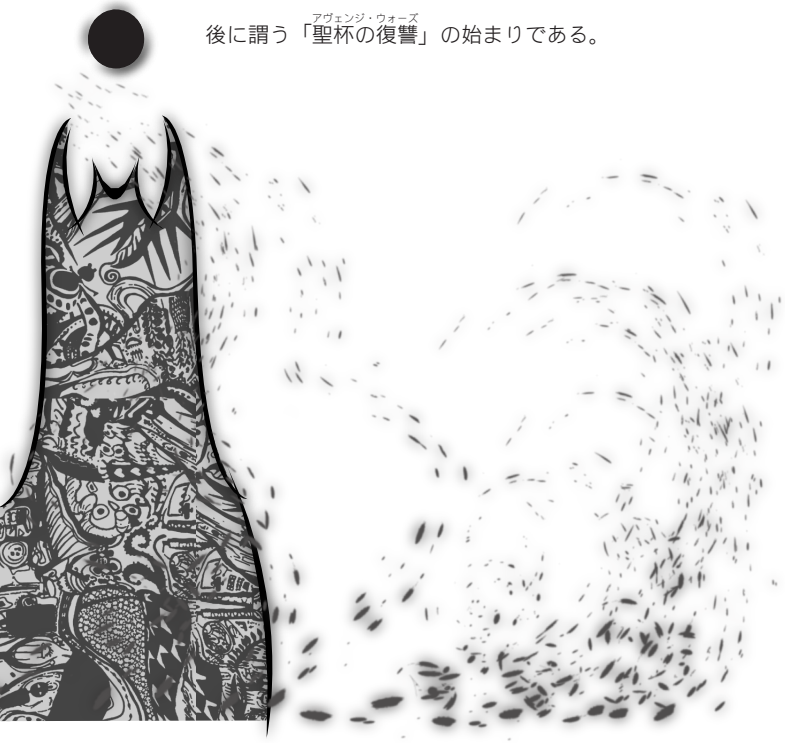


この戦いは1942年に終結した第三次聖杯戦争に端を発する。

敗北を重ね、不毛な切望に憑かれた一族は
三度目にして魔に至る妄執を以って規格を捻じ曲げ、
自らの聖杯を漆黒の泥で満たす愚を犯したのだ。

そして1992年3月25日———
遂に聖杯戦争は崩壊への坂を転げ始める。
第四次、第五次聖杯戦争と二度に渡る歪な戦い、

後に謂う「聖杯の復讐（アヴェンジ・ウォーズ）」の始まりである。

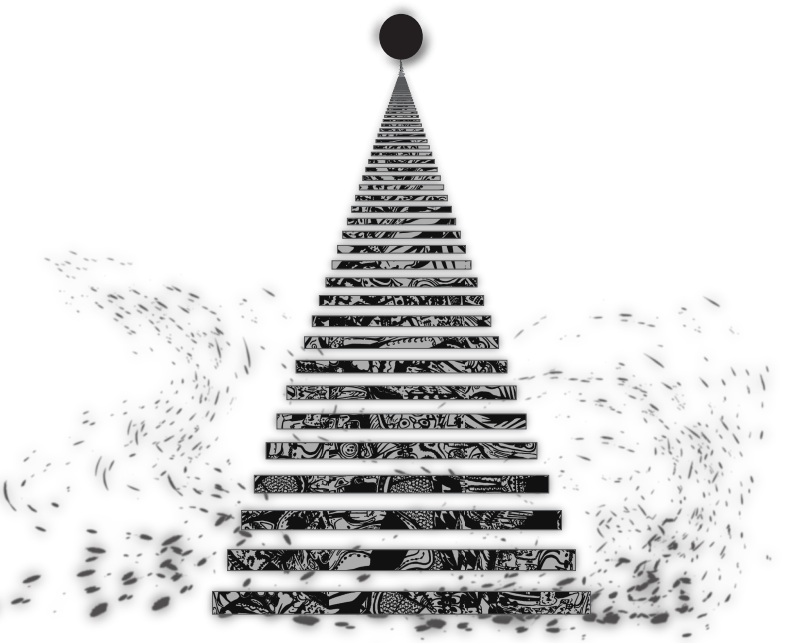


されど、復讐は孵(かえ)ることなく。
———2002年2月15日、第五次聖杯戦争終結。

大本たる大聖杯こそ健在だが、
勝者はいずれ辿り着き、これを破壊する。
聖杯戦争は第五次を以って終わり、妄執は砕け、
復讐は虚無へと還ってゆく———

されど、終戦と消滅の僅かな間。
温められた卵は、雛を抱えたまま煮返され。

「聖杯の復讐(アヴェンジ・ウォーズ)」は、最後の一幕を開ける。



the prologue: "20 seconds"

February 1st, 2002

今宵、血煙に酔う。
今だけは、その場の誰しもが嗅ぎ慣れた鉄錆の臭いが、その場の誰しもを侵す甘い毒と化したかのように。見慣れたはずの無数の赤い飛沫(しぶき)は、全てを眩惑するかのようにゆっくりと宙を舞う。
蒼い月灯りに押し留められたその血煙は、されど幻想にあらず。静止した空間を支配する唯一の現実、無慈悲な深紅の緞帳である。

愉悦に酔うように黒鍵を引き抜く神父。
混乱と血煙を引いて崩れ落ちる魔術師。

本来魔術師を守るはずの槍兵は舞台に間に合わない。彼は邸外にて即座に主の異変を感じ、神速を以って内へと実体化する。だが、その僅かに遅れた登場が、全ての運命を決定付けた。
血煙の中、神父の左手が崩れ行く女の左腕を引

き戻す。あたかも臨終の羊に手を差し伸べる、慈悲深き神の下僕であるかのように。
主よ、と彼が呟いたかどうかは分からない。
次の瞬間、彼女の背から引き抜かれた黒鍵は、男の右腕と共に蛇のように跳ね上がる。刺し貫いた相手が膝をつくことすら許さず、女の左腕を根元から一息に切り上げ、その手中へともぎ取った。
――血飛沫が更に濃い霧となる。
その赤い霧が毒となったか。本来言葉より手が優先するはずの英雄に、ほんの僅かな精神の空白が生じた。

「バゼット――――!」

己が主の名を叫ぶ間こそあれ。
それは惨劇を把握するまでの刹那の間。だがこの一幕を演出し、全てを把握していた言峰にとって、次の一手を打つには十分すぎる間合だった。
バゼットが自らの血溜りに倒れ込むよりも速く、裂ける肉の音を契約の証とでもするかのように、神父は厳粛な声で直ちに宣言する。切り落とした腕を持つその五指は、既に透き通るように彼女の令呪に溶け込んでいた。

「告げる、汝の身は今や我が下に――」

生命から切り離された腕が起動式によって脈動し、言峰の指の下に膨大な魔力が集約される。
槍兵が立ち竦んでいたのは瞬きの間。

「テメエ……!」

彼は直ちに言峰の意図を察し、即座に全身の筋肉が戦闘態勢へと切り替わる。彼我の距離は僅か数メートル、ランサーにとっては無に等しい。
零秒の差で一足飛びに踏み込む青い槍兵。赤い

魔槍は使い手の声を待たずして具現化し、両者は青赤の光となって敵の身体を指向する。
だが黒い神父は巌の如く表情を変えず、絶対なる死の暴風を目前に言葉を紡ぐ。
「聖杯の規律に従い、ここに契約を強制する」
その声は、閉ざされる扉の響きにも似て――

「主変えに賛同しろ、ランサー」

淀みなく、英雄の運命を決定した。
集約された魔力が開放され、
室内の時間が再び静止する。
全力で振るわれた魔槍は、既に黒い僧服を引き裂いており、その鉾先は早くも神父の皮膚を削り、敵を貫く瞬間を今かと恋焦がれる。
だが、その槍はそれ以上進むことなく。
令呪の魔力はランサーの豪腕に強制的に力が篭めさせ、英雄ならではの勢いでその得物を瞬時に停止させた。間をおかず、令呪の戒めが彼の精神をも十重二十重に縛り上げる。
――復讐は果たせず。
最初の騙し討ちから、都合二十秒。たったそれだけの一幕で、この戦争は大きく捻じ曲げられた。今やランサーに許されたのは、ただ己が主たる昏い神父を睨みつけることだけだった。

「言峰、貴様――」

神父は契約の発動を確認すると、即座に霊媒手術を得意とするその指を通じてバゼットの令呪を苦もなく吸い上げ、自分の腕へと移植した。

べちゃり、と鈍い音が響く。
バゼット・フラガ・マクレミッツは己を殺した刺突から二十余秒、ようやく血溜りの中に伏す事を許された。

――その時、冬木の街に眠る館の一部屋で、
一つの惨めな喜劇に幕が下り、
一つの哀れな笑劇が幕を上げたのだ。

槍兵は無言で血溜まりの中心へと足を進める。
今やその足元には、自分を現世に呼び寄せたルーンのイヤリングが、その輝きには似合わぬ朱色に染まっていた。
「さてランサー、快く理解してもらえるとありがたいのだが」
慇懃な神父の声を黙殺し、彼は僅か十日前の主従の誓いと同じように跪く。……ああ、まだかすかに息がある。だが、それもあと数秒だ。もはや彼の全てのルーンを刻んだとしても、彼女の蘇生は適わない。いや、それ以前に、令呪の縛りは彼にその試みすら許さないだろう。
「――ふむ、これはもう一つ令呪が必要なのかもしれんが」
「五月蝿い野郎だな、今度のマスターは」
一切の感情を込めず、ランサーは言峰を遮った。
「慌てるんじゃねえよ、抗おうとは思っちゃいないさ。こちとらお前さんと違って義理堅い身でな、ちったぁ感傷に浸らせてくれや」
無意識の領域から軽口を叩きつけると、それでもはや充分と言うように、彼は再び言峰を意識外に追い出した。彼はそのままゆっくりと、崩れ落ちたバゼットの上へと屈み込んだ。

監視役たる言峰の訪問を受ける、その事自体に異論を挟むつもりは無かった。教会に出向くのではなく、自陣側へと呼び付けるのであれば、特に問題は無い。
だがバゼットは、言峰との会談中は霊体であっても外で待機せよ、と命じたのである。

（彼は協会にも教会にも籍を置く曲者です。貴方の正体など明かさぬに越したことはありません。それに霊体とはいえ、一級の代行者には何らかの情報を見破られる危険性もある）
だが、それは如何なる矛盾か。言峰を警戒しているのであれば、サーヴァントを遠ざけるべきではないだろう。
（とは言え、それほど心配することはありません。教会の敵とはいえ、彼とは何度か共闘関係を組んだことがあります。……その、彼の在り方は明らかに悪ではあるのですが、歪んだ行いだけはしない男でもありますから）
矛盾は更に複雑な螺旋となる。もし言峰を信頼しているのであれば、サーヴァントを遠ざける必要などないだろう。
何のことは無い。バゼット・フラガ・マクレミッツは油断などによって死んだのではなかった。

彼女は中途半端（どっちつかず）などという、魔術師としてはあるまじき愚行の結果、当然の報いとして命を落としたのである。
「――バゼット」
だが、彼女を守れなかったのが自分である、という事実もまた動かない。この十日間を共に戦い、彼女の弱さは十分に理解したつもりだったのだが。
恐ろしく強く振舞うクセに、驚くほど不器用な面を見せるバゼット。恐らくはその脆い精神を鎧うため、味方にすら気を許すことは無く、常に独りで戦い抜いてきたのだろう。
――十日間。召喚から三日を経る頃には、少しずつその鎧にヒビを入れていくのが彼の楽しみとなっていた。この自分が背中を預けられる存在なのだと、彼女自身に信じさせる過程。それは、ランサーをして久々に女運を感じさせる、なんとも好ましい日々だったのだ。

（ったく、それが選りによってこんな野郎にだけ鎧を解いて見せるとはな――）

その嫉妬にも似た感情を以って、彼はバゼットの血溜まりに膝をついている。

「ラン、サー……？」

近づいてくる槍兵の顔を認識できたのか、彼女はその最後の息で、自らの騎士に必死の言葉を伝えようとする。

「気にすることは、ありません、ランサー。魔術師の死は、いつだって、理不尽な、ものだから」

だから、貴方は、自由に――

「……アンタ、最後までバカな奴だな。最後ぐらい、自分のコトを言い残さないでどうすんだ」

本当に、バカで、いい女だった。

ランサーはバゼットの耳からイヤリングを外して立ち上がる。その指先に僅かに魔力を込めると、こびりついた朱ははらりと地に落ちた。

片割れを胸に。片割れをこの部屋に。

『――天堕ち地裂け、海がこの身を飲まぬ限り、我が矛は必ずや貴女の敵を討つ』

主従の誓いはここでなされた。彼は決して、その履行を諦めはしない。ならば、その証をこうして残していくのも、悪くは無いだろう。

ランサーはバゼットに背を向け、終わってしまった戦争に、唯一復讐の機会のみを求めて臨んでゆく。この槍は、最後には彼女の敵を討つだろう。

だがこの時はまだ、歪んだ聖杯の存在に気が付くべくもない。その地底深くには、聖杯に巣食う歪な呪いが、願いの受諾を待ち構えていた。

（いいぜ、アンタの望みを、叶えよう――）

――to be continued to, "アナゴウラ"

幕を下ろすのは彼だけではない。
この夜戦うもの全ては。
自ら望んだ未来の為に、この幻想を打ち棄てて―――

各々の意志、各々の再会、各々の別離が
この夜の内に終わるのだ。

"Fate/hollow ataraxia"

"the avenger"
1: セイギノミカタ

"for them the bell tolls"
2: 彼らが為に鐘は鳴る

"world without end,"
3: そして終わりなき世界に、Amen.

Hollow/avenge night

今宵、復讐と報いは彼のもの

維如星

舞台はハネた。

最終公演は遥か眼下に過ぎ去り、役者たちは皆終幕を背に、思い思いの舞台挨拶に立っている。

それもあと僅か。いずれある者は舞台裏へ、ある者は楽屋口へ、それぞれ彼らを待つ者の場所へと還ってゆくのだろう。

そんな彼らを。黄金の日々の大切な欠片を足蹴にして、オレは最後の階段を昇ってゆく。

ああ、主役もここまでだ。

主演を見送りに来た少女は最後に小さな花束を渡し終え、一足先に舞台を降りた。もはやオレを見上げる者はなく、やがてオレを見下ろす女が一人、この先に待つばかり。

だから、この殻はもう不要だ。

形を崩しても傷つく少女はもういない。人格の殻まで捨てては虚無に還ってしまうが、肉体の殻はそもそも聖杯の中には踏み込めないのだ。なに、この反吐のでる人殻さえあれば、マスターを宥めるぐらいまでは持つだろう。

「だから、オマエともここまでだぜ、衛宮士郎」

そう分離を口にして。黒い逆月を目前に、オレは階段を数段昇ってから振り返る。背後には立ち止まった自分――衛宮士郎と呼ばれた少年が、既に影となったオレを静かに見上げていた。

「確かにここまでだろうな」

そう言って衛宮士郎は分離を肯定する。

「これが戦争の再現だっていうなら、聖杯に辿り着くまでは俺の役目でも、最後の破壊はサーヴァント、つまりおまえでなければ行えない」

そう呟くヤツの目は何処か遠い。ま、どうせ第五次の終焉、コイツの大切な騎士様でも思い出しているのだろう。

お互いに理解に苦しむ在り方のオレ達は、だが結局は、そんな記憶まで共有するに到った。

「まったく、ここまで散々好き勝手やってきたんだからな。最後を任せちまうのは不安だけど、キチンと締めてこいよ」

少しばかり面白くなさそうに、オレの殻だった男はそんな言葉を口にした。

「へっ、なーに言ってやがる。この四日の間、本物のオマエはオレだったんだぜ？　アインツベルンのお墨付きだ、好き勝手やってたのは紛れもないホンモノの衛宮士郎だろうが」

ま、夜の部門に関してはちょいと嘘があるが。

「……それはわかってる。本物でなきゃ投影魔術なんてできないし、第一俺でもない奴に、あんな楽しい日々を許すもんか」

なんだ。その口振りで分かった。

この偽善めいた少年は、単に問題の解決に自分が手を下せないコトに拗ねているだけなのだ。なんて分かりやすいヤツ。

「そりゃまあ楽しかったもんなあ。大体セイバーの水着を拝んだりイリヤと添い寝できたのはオレのおかげだろ」

と、オレは影のままケラケラと笑ってみせる。

「これでも一応聖杯の生まれだからな、多少は憑いた少年の健全な望みも叶えてやらなきゃ嘘ってもんだ」

「……っ、だからそれは俺が実現したコトだろ！　おまえに頼ったのはせいぜい教会の――――」

衛宮士郎はそこまで言いかけて会話の不毛さに気づいたのか、小さく肩から息を抜き、そしてさっぱりとした表情でオレを見上げなおした。

「ま、何にしてもここまで来れたんだ。細かいことは無しにしてもいいか」
「おう、物分りが良くて助かるね。何処ぞのマスターにでも見習わせたい気分だ」
黒い逆月の脈動が聞こえる中で、オレたちはそんなトボけた会話を紡いでいる。
「でも細かいことって言うがな、オレがオマエだったのは一応必然なんだぜ？」
そうだ。オレはオマエでオマエはオレ。バゼットの願いを叶えるために被った衛宮士郎の殻ではあるが、これでもオレはサーヴァントである以上、無差別に物質化できたりはしない。英霊（オレ）がカタチを取りやすい役割（クラス）、器が必要という聖杯戦争のルールは頑として存在する。
「外側のオレは第三魔法の体現とやらで勝手に受肉できるみたいだがな。復讐者（アヴェンジャー）は元々規格外のクラスなもんで、第五次の真っ当なシステムには使える器がなかったらしい」
つまり聖杯戦争を再現するために必要だった前回の勝者は、このオレをカタチにするためにも不可欠だったのだ。
その両者が重なったのを幸運と見るべきか。
あるいは、所詮お互いが聖杯を挟んだ鏡像存在、両極にありながらも結局は同じ方向性を持った存在である以上は必然だったのか。
「待てよ。おまえは単に俺が前回勝ったから俺を選んだんじゃないのか？　俺がこの世全ての悪（アンリマユ）の取りやすいカタチなんてワケがあるもんか」
衛宮士郎は当然とばかりに疑問を口にした。
……なんだ。コイツ、全然わかってないのか。
オレの記憶が確かなら、以前アーチャーにも似たような糾弾を受けてるはずなんだがなあ。

「あ？　だってオマエ『正義の味方』なんだろ？　だったらオレたちは兄弟さ。なんせオレは復讐者（アヴェンジャー）なんだからな」
「だからそれの何処が兄弟だって。言っとくけど俺は復讐なんてしたこと無いし、人を殺して回る趣味もない」
衛宮士郎は憤然として言葉を返す。
「確かに今回のおまえはそんな酷い奴にも見えなかったけど。それは俺っていう殻を被ったからの話じゃないのか」
役割（クラス）ってのはそういう表面的な意味じゃないんだがな。ま、一つお節介でも目を覚まさせてやるとしよう。一応恩義もあるし。
「はいはい、確かにオレとオマエの在り方自体は正反対ですよ。でもな、お互い在り方の根源ってモノを持ってるだろ、正義の味方さんよ」
オレは軽く唇を舐めて語りを入れ始める。舐めたように影が見えているとありがたいんだが。
「――復讐者（アヴェンジャー）って言葉の意味、知ってるか？」
それはそんなに意外な方向性だったのか。目の前の少年は不意を突かれたような顔をした。
事実、その言葉は衛宮士郎でも、アンリマユと呼ばれた青年でもなく、アヴェンジャーというクラスに与えられた知識である。
「そもそもアヴェンジ（AVENGE）って言葉の語源は、訴訟をカマしての弁護主張を意味する、実に奴ら（ローマ）らしいラテン語なんだ。今じゃ廃れたが、時代によっちゃ誰かを解放するって意味もあった」
弁護人、護り手、解放者。
今のオレからは程遠い言葉だが、それでも、オレという存在（サーヴァント）の根源はそこにある。
「何処ぞの神サマも言ってるだろ、復讐と報いは

我のもの――つまりな、自分で恨みを晴らしちまうなら復讐じゃなくて報復。復讐とは本来、他人の仇を討つモノなのさ」
　我ながら巧くまとめたかと思ったが、コイツは胡散臭そうにオレを見ている。なんでさ。
　……まあ、確かに言ってるオレだってホントかよ、ってな風情の話だわなあ。でも、それがオレに課せられた役割なんだから仕方がない。
　それに――オレも一つぐらい、人であるうちに、人間らしいコトをしておきたい。
　この矛盾した日々を共有した男に。バゼットと似たり寄ったりのどうしようもないバカで、愚直に偽善を貫き、いつかは自滅するだろう理想の存在に、一発ぐらい根性を入れてやらなくちゃ、この黄金の日々を見せてもらった義理を欠くってモンだ。うーん、なんて義理堅いオレ。
　だから、オレは最後のダメ押しを言葉にする。

「要するに、だ」
　どうせ明日になれば忘れちまうんだろうが。
　それでも、一度受けた言葉であれば、いつかまた辿り着くこともあるだろう。

「復讐者とは正義の為に当然の報いを与える者。
　――正義の味方ってヤツさ」

　衛宮士郎が目を見開く。否、糾弾するかのようにオレを睨みつける。
　束の間の沈黙。天の鳴動はすぐそこに。
　やがて衛宮士郎は絞り出すように、
「おまえは正義の味方だって言いたいのかよ。六十億の人間を呪い殺すヤツが、自分の為には殺さないって言うのか」
　己が存在に還る問いを発した。
「当たり前だろ、今のオレが誰に報復するってん

だ。オレを祭り上げた連中はとっくにオレを置いて行っちまったし、そもそも自己の根源に報復するなんてのは何処ぞのコピーバカで十分さ」
　けっ。思わず何処ぞの槍野郎謹製の台詞を使っちまった。まあ、言い得て妙だよなコピーバカ。
「確かにオレは自分の意志で殺す。そして多分自分の意志で六十億の人類全員に復讐する。それがオレの機能だからな。だがその復讐が還る先はオレじゃない。アンリマユという存在に全ての悪心を託した人類に還るんだ」
　復讐を依頼したのはオマエら人間だろう、と。
　オレという存在ではなく、アンリマユという青年が心の何処かで叫ぶように声を上げる。
「自分に見返りなんて何もない。他人を悪と糾弾することで己の正義を確信させる、そんな存在にオレの機能は固定させられたのさ。ま、もはやどうこう言うつもりはないがね」

　オレとコイツは目を逸らさない。もっとも、オレにはもう目なんて部位はないのだが。
「オレとオマエは同じ存在なんだよ、衛宮士郎。人の罪を背負って復讐するのも、人を救ってその罪を背負うのも、根本的には変わらない。手前の金貨を使って他人に責任を放棄させる、支払うばかりで実入りのない自己犠牲――」
　ほらな、とオレは両手を広げてみせる。
「オレたちは兄弟だ。だがな」
　その先を既に察したのか、衛宮士郎がオレをねめつける視線が少し緩む。そうだ。もはやどうこう言うつもりはない。
「俺たちは、とっくにそんなコトは分かってる。……そう言いたいんだろ、アンリマユ」
　少年は初めて、呪いの名称ではなくオレの名前として、その単語を口にした。
「ああ。オレは何処ぞの切開好きな神父じゃない。

オレたちはンなモンとっくに分かってて、それでも自分の在り方を変えない、そういう存在だ」
かつて、そこに美しいモノを見い出した。
偽善を為す一人の人間に憧れたから。
悪を為す人類に美しさを感じたから。
俺たちは振り返ることもなく、
自分に還らない金貨を世界に積み続ける。

衛宮士郎は二呼吸ほどの間瞑目し、
「じゃあ、なんでおまえは止めるんだ」
そう、口を開いた。
「聖杯戦争を呼び戻し、四日間を回し続けたのは契約主の為の復讐だ、ってコトだろ。じゃあ、それを止めるのは誰の為の復讐なんだ」
それは決して糾弾ではなく、自分と同じ在り方の存在に対する不安だった。

「黄金の日々と呼んだ四日間――これっておまえが手にした数少ない、いや初めての金貨じゃないのか。それをまた還しちまうのは、おまえの在り方を貫くためなのか」
まったく。コイツといいカレンと言い、正義面した連中は似たようなコトを聞くもんだな。
「……そう言うオマエはどうなんだ。オレたちは一つの存在として、この螺旋を終わらせようと決意したのは確かだが。……ああ、オレにはオレの、衛宮士郎ではない理由がある。けどな」
それでも――心の何処かで、

（理由ハナイ、終ワラセルナ――）

引き返せと、嘘をつくなという声がするから、。
「今度はオマエが先に言う番さ。そもそも本当に、オマエは終わらせたいのかってな」

一度ぐらい人間らしく、同志の言葉を欲しがってもいいんじゃないかと思えた。
そんな矛盾した心が見えたのか、衛宮士郎という少年は、軽口ではなく真剣な表情で答える。
「俺は――ああ、終わらせたい。ここは誰も欠けてない、確かに理想郷みたいな場所だけど」
故人が歩き、サーヴァントが笑う日々。
（ソウダ、忘レルナ、忘レルナ――）
少年はそれを、夢見るような顔で振り返る。
「彼女がいる日々は、最高に幸せだったけど」
誰よりも、ただ一人愛した騎士を前にして。
（誰モガコノ日々ヲ求メテイルノニ――）
だが同時に、少年はその女性自身と、一つの神聖な誓いを交わしていたことを忘れない。
「それでも、失われたモノを還すことはできない。涙も、痛みも、胸を斬り抉る重さも――今までの日々を嘘にしない為に、この身に刻んだままでなくちゃいけない」
そう、オレの脳裏に響く声を切り伏せて、
（ウソダ、ウソダ、ウソジャナイ――）
殺したくなるほど真直ぐな瞳で、迷うことなく、
「この日々は嘘だ。どんなに幸せでも、俺が、みんなが積み上げてきた過去がない。それは未来が無いことと同じくらい、許せない」
衛宮士郎は言い切った。
ああ――チキショウ、当たり前だった。
（苦しみながら呼吸をしてきた過去を）
バゼットが未だ辿り着けず、オレが何万回の果てに決めた答えを、
（オマエが認めてやらなくてどうするんだ）
コイツはとっくの昔に持っていた。
オレは薄く笑った。この影の身が、逆月を仰い

で嘆息する。こりゃあもう、引き返すなんてどう足掻いてもできない相談だ。
「で、そういうおまえはどうなんだよ」
真剣に答えたのだから全力で答えろとでも言うように、今度は衛宮士郎が改めて問いかける。
ちぇー。こっ恥ずかしい理由なんだから聞くなよ兄弟。ってま、そーゆーのは通じなさそうだ。
「まあ、飽きたから。マスターの為つっても一応オレも楽しんでたんだけどさ。黄金の日々も何億回も繰り返せばそりゃ飽きるってモンですよ」
衛宮士郎は目を見開いて真顔になる。
あーくそ。同じ存在ってのは厄介だな、今の台詞がどんなに在り得ないモノかがバレてやがる。
それは誰の為でもない、自分の為の望みなのかと、永遠の債務代行者が目で問い掛ける。
「なんだよー。オレだっていつも高尚な理由で動いてるワケじゃない。むしろ高尚なコトなんて皆無と言うべきか。……大体オマエにも在っただろうが。無限の渦の中には、在り方を捨てて一人の女に走っちまった選択肢(ルート)がよ」
そして在り方を違(たが)えるという事は、自分を殺すという事だってのも知ってるハズだ。
「一人の為に——他人に祭り上げられた理由じゃなく、自分の内から発した願い、か」
同じ他人に向けた偽善でも、その二つはまったく異なる行動である。ホント、在り得ない。
「ま、これで復讐は終わりさ。マスターの為に健気にも何万回も復讐(ころ)してやったし」
そう言ってオレは頭上の逆月を見上げる。
「今夜で最後、自分を許せないバカな女のために、この虚ろな楽園(ホロウ・アタラクシア)も復讐(こわ)してやるさ。まあ、この後速攻ブチ殺されなければ、だけど」
「復讐——つまり、それは俺(オマエ)のためじゃなく」
「バカだよなー。大体オレは虚無だから気にしないけどさ、ここにいたって永遠に苦しむのはアイツの方。終わったら消えるのはオレの方だってのに、壊すって言うと殺すって言うんだから、まったくツンデレマスターの攻略は難しいわなあ」
ところでツンデレってなんだ。
「……うわ、ホントに同じなんだな俺ら。まったく、聖杯があれば彼女とずっといられるってのに。憧れたヒトのカタチを守るために、ソレを壊さずにはいられないだなんて」
衛宮士郎が嘆息する。まるで自分と同じようなバカを初めて見た、と言わんばかりに。
むう、そーゆー共感を食らうだろうから言いたくなかったのに。ま、コイツ自身が自分のバカを認識できたなら、それもいいか。
「わかってくれたか兄弟。ま、そんなわけで先を急がせてもらうぜ。オマエの相棒と違って、ウチのは随分と頑固なヤツだから」
「それ、オマエが頑固王(セイバー)を知らないだけだろ。言っとくけど、半年前とか凄かったんだからな」
「はっはっは。不幸自慢なら悪いが負けねえ。なんせこっちは何万回だ」
刻限が近い。くだらない台詞の応酬は、その実、繰り返してきた美しい日々の残照。
また、眩暈がする。コイツと再び一人になり、与えられなかった黄金の日々を回し続ける——そんな妄想めいた眩暈に何度も捉われる。
だが、それも終わり。オレたちは宴の終わりを示すかのように、互いに背中を向けた。
「ま、そういうの、なんて言うんだ。アイツも男運ないとか思ってたけど、これも女運がないって言うのかね、それとも」
「……待てよ、俺もオマエも惚れたのはたった一人だろ。女運なんて言う台詞は——」
「ケケ、その発想が火種だっての朴念仁。外には

切開好きの危ない女も一人増えてるし、せいぜいお家騒動を起こさないよう気をつけな。……まったく、この街で戦争が起こしやすかった理由、わかった気がするぜ」

こんな背中合わせの軽口ってのも悪くない。

もし全てが巧くいったなら、あるいはせめてぶっ殺されさえしなければ、願わくばマスターともこんな形で別れてみたいモンだが、そりゃ過ぎた望みってヤツだろう。

さあ、舞台はハネた。

「じゃあな、兄弟。正直、オマエみたいなヤツには反吐が出るんだ」

「ああ、同感。次に会う時は、憑かれる間もなく大元を壊してやるさ」

その決別の言葉をもって、オレたちはそれぞれの一歩を踏み出す。

この階段を昇れば、憧れた相手との別れが。

この階段を降れば、別れた相手との憧れが。

もはや言葉は要らない。オレたちはお互い理解はできずとも、納得ぐらいはした。次に会う時は、気兼ね無く殺しあうだけなのだから。

――最後の幕間はこれで終わる。

カタチを持った勝利者と、

カタチを失った解放者が、

それぞれの終幕へと、駆け出してゆく。

2: "for them the bell tolls"

October 11th, 2002

世界が割散してゆく。

冬木の街は次々に砕け、剥離し、まるで巨大なすり鉢を逆さに見ているかのように、天の逆月へと世界の欠片が落ち込んでいく。

そのひび割れた化粧の下からは、やがて五日目という現実が姿を現すだろう。あちこちが欠けていて、傷ついていて、この黄金の四日間ほどな輝きはないとしても。

それでも、五日目には六日目があるのだから。

世界の剥離が始まった瞬間、冬木の街を埋め尽くしていた獣が一斉に活動を停止した。

黒い影は天を仰ぎ、耳障りな叫び声を上げながらも、その四肢は凍りついたように動かない。

『イヤダ　イヤダ　イヤダ――――』

無限の骸が叫ぶ様はまさに阿鼻叫喚。

彼らが地響きの如く揺らす冬木の大気が、まるで世界の割砕を加速すらしているかのよう。
嫌だ嫌だと。虚ろな楽園の死を何億と担っていた彼らは、一体、また一体と、周囲の空間ごと剥がれて天の獄へと堕ちていく。

「――終わったのね」
その時、少女の周囲には僅か二メートルほどの空間が残されていたのみ。彼女が立つ鉄骨の全てはおろか、その身を護る結界にすら骸どもが噛りついている。
それでもなお赤い魔術師は眼下を押し渡る大軍にのみ砲火を加え、自分の護りは時折赤い騎士が周囲に放ってくれる一斉掃射に任せていた。
その赤い騎士は、文字通り波濤の中に聳え立つ一つの巌。一秒ごとに百を薙ぎ払い、百を吹き飛ばし、百を切り伏せ、なお万を以って殺到する獣の流れに頭上からの支援砲撃を疑わず、正面から対峙し荒れ狂う剣舞と化す。ある意味守護者としての殺戮に最も近いこのスタイルは、彼が否応でも得意としたモノであった。
「どうやらそのようだな」
だが、それもここまで。真紅の外套を翻し、彼は己が主の傍へと跳躍する。守護者じみた大殺戮も彼女がいればこそ、その聖骸布を纏う意味があるのだと言うように。
――世界が鳴動している。アーチャーは瞑目するように一時面を伏せ、聖杯と繋がった知識から自らの刻限を悟った。
「まあ当然だな。かつての戦争に、私が残るという選択肢は無かった。いや、この分だと全てのサーヴァントは消え去るだろう」
従者の台詞に凛は驚くこともなく、ただ寂しげに笑みを返した。
「もしかしたらセイバー辺りは残れるかな、とか思ってたけどね。……そっか、衛宮くんは一番辛くて綺麗な選択をしたんだった」
剥落した四日間の隙間から五日目が姿を表すにつれ、凛の持っていた無数の記憶も一つの流れへと集約されていく。
「あーあ、長い夢もこれで終わりか。ま、わたしは四日間しか知らないはずなんだけど、でも」
凛は砕けゆくソラを仰ぐ。
戦いは終わり、冬木の管理人としての顔をしばし解く。やがて彼女は魔術師ではなく、一人の少女としての言葉を口にした。
「ね、アーチャーは、楽しかった？」
それは陽炎のような笑顔。
過去は変えられない。彼女の記憶からはもはや、彼が何者だったのかすら失われ始めている。半年前にこのヒネくれた青年を救えなかったのなら、今この場でできる事なんて何もない。
ならばせめて気楽な別離を、笑いながら彼を送ろうと彼女は願ったのだ。
そんな主の意図を知ってか知らずか、アーチャーは凛の質問を一笑に附すかと思いきや、表情こそ皮肉であれ素直に答えた。
「無論楽しかったとも。凛、そもそも楽園とは誰にとっても楽しいように創るモノだ」
訂正、素直なのは出だしだけ。やはり一言垂れておかないと気が済まない性格らしい。
「平凡な日常さえ約束されていれば、似たような日々の些細な変化を楽しむのが人間の在り方だからな。この楽園はそのように作られた以上、楽しまなかった役者などおるまいよ」
まるで楽しかったのは自分の責任ではない、とでも言うように彼は肩をすくめた。

ある面において、それはサーヴァント、いや英霊に取って当然の日々なのかもしれない。自分の意志に関わらず呼び出され、束の間の現界を強要される日々。数日後には消えてなくなり、本体に記憶すら残らない虚ろな現世。

しかし、それでも凛は彼に感想を問うた。

「そっか。……ちょっとだけ安心したわ。やっぱアンタたちでも楽しいと思うんだ」

永遠に解放される事のない英霊（ガレアノイン）たち。

だがこの四日間は戦闘こそあれ、戦争や殲滅が目的ではない、彼等が人として過ごせる実に例外的な平和（にちじょう）のための現世だった。

「ああ。例えそれがただ腐らないだけの、退屈極まりない澱（ホロウ）んだ世界であったとしても、な」

それが本質ではないと知りながらも、この僅かな楽しみが彼にとって救いの欠片にぐらいはならないかと、彼女は一時夢想したのだった。

その想いを隠すように、凛は軽口を叩く。

「その結果があのギョシンプレイってわけ。アンタの日常って結構スゴい趣味してるのね」

「……む、フィッシュは私の好むところだが何か問題なのかね。というか見ていたのか凛」

「冬木の港が怪しい三人組に占拠されてるって聞けば管理人として出向かないわけにいかないでしょう？　ま、面白いモノ見せてもらったわ」

きしし、と笑みを浮かべる凛。

やれやれアレは、と弁解するアーチャー。

――本当に、なんという平凡な日常の一コマ。

「……でもアーチャー、本当に終わらせちゃって良かったの？　士郎なんて外に帰れば、またぞろ正義の味方に邁進しそうだし。ここらで飼殺しにしといた方がアンタにはよかったんじゃない？」

ふと、意地悪くそんな質問も向けてみる。

「冗談ではない。あの男がこんな楽園に安住することこそ許しがたい。アレは現実の中で負け犬のように藻掻き苦しむのが相応しい」

「ふうん、だからあんなに色々ケシ掛けたってワケか。ま、相変わらず素直じゃないんだから」

ホント、捻くれたヤツ。

だって藻掻き苦しめというのなら、アイツはこの楽園の中ですらとっくに足掻いてた、たった一人の登場人物だったんだから。

「ふん、それがアレの運命とも言えるからな」

破砕の響きが一際大きくなる。瞬間、鉄橋の一部が天へと砕け落ちていく。

「だから――凛」

残らない記憶。数刻の後には忘れられる言葉。

ならば、多少の戯言も許されよう。

「――せいぜい、君が支えてやることだ。あの男の藻掻き様も、少しはマシになるかもしれん」

言い捨てるようなその言葉に、凛は両手を胸に当てて目を丸くした。……ここ一番で瞬発力を発揮できない彼女はその言葉を飲み込むのに数秒を要し、そして小さな声で、だが力強く呟いた。

「うん、どうせ忘れちゃうけど、頑張って思い出してみるから、何とかしてみせるから――」

再びソラを仰ぐ少女は独り。

何故なら、その時既に赤い騎士は砕け散り、天の底へと還っていたのだから。

その時、彼女らは山門への途上にあった。

柳洞寺のある山頂からは、文字通り轟雷の如き閃光と爆音が響いてくる。――その上空、魔術師の貌を持った今なら視（み）える。大瀑布も斯くやと紫電の鉄槌を振りかざす存在。一人の女性として微笑み憧れた隣人は、魔術師としては畏怖と敬意を向けるべき魔人であったことが。

だが、それも終わった。
石段を流れ落ちる圧倒的な骸の濁流は、桜程度の魔術で溯れるモノではなかった。いつしか前を征く破城槌ともはぐれた中、ライダーは無茶を知りつつも己が主の心意気に応えるべく、まさに天馬を解放せんとしていたところであった。
「間に合わなかった――」
桜は俯いて唇を噛む。……本来、これは勝利である。後方で大軍を抑える中、たった一騎の騎士が天へと駆け登り、敵の中核を討ったのだから。
「どうせキャスターさんがいたなら加勢なんていらなかっただろうけど……」
だが、彼女は初めて、負に拠らない自らの意思で討って出たのだ。例えそれが大局に影響しない出撃であったとしても、せめて前線ぐらいには到達しなければ、彼女の姉には――
「それは誤りです、サクラ。この戦いに後方などはない。それに私たちは敵陣の口に立っている」
凍りついた黒い影から鎖を掃い、ライダーは桜の方へと向き直る。
「貴女はこの濁流に呑まれなかった。むしろカレ等を僅かでも圧せたのですから、これは誇るべき戦果です」
それは世辞などではなく、彼女が主に抱いた偽りのない感情。驚きと喜びを以って見守った、桜の小さな奮起の結末だった。
「……ありがとう、ライダー。貴女がいてくれたから、わたしもここまで来れた」
桜は表情を緩め、むしろはにかむような笑みを浮かべてライダーに目を向ける。その身体は慣れない魔術行使の反動で汚れ傷つき、その肩には隠しようのない疲労が見えているとしても。
「あのね、正直言うと……わたし、楽しかった」
互いの背中を預けて戦うということ。常に守ら

れてばかりだった彼女、常に独りで抗うしかなかった彼女が、初めて経験した共同作戦。
不謹慎ながら、桜の脳裏にあったのは、衛宮家の台所で背中を合わせて腕を振るう、仲睦まじい二人の姿であったのだ。
「実を言うと、私も同感です。共に戦い、同時に貴女を守れたのなら、私も貴女の騎士としてようやく面目が立ちます」
守っていたモノを、いつしか呑み込んでしまう化物。彼女の頭には常に、自分は騎士としては相応しくないのではという思いがあった。
桜とはまた違った意味で不器用なライダーの真摯な言葉。だがそんな二人だからこそ、彼女らは最高の主従だったのかもしれない。
桜はかすかに蒼い髪を揺らして、彼女の騎兵の言葉を心で包み込む。
「……そんなこと。貴女はいつもわたしのコトを一番に考えてくれてた、最高の英霊さんです。こんな素敵な女性がいつも側にいてくれて、わたしも鼻が高かったんだから」
あ、でもちょっとライダースタイル良すぎ。セイバーさんにしても英霊はいくら食べても太らないとかいうインチキルールはいい加減破戒して欲しいですお願いキャスターさん。
「うーん、でも少し残念かな。最後に貴女の宝具でここを駆け上がれたら、もっとかっこいいヒロインになれたかもしれないのに」
大魔術でぶいぶい言わせてたに違いない凛を頭に浮かべながら呟く桜。だがライダーはその空想を読んだかのように、クスリと笑って訂正する。
「そういう粗暴な役回りはリンにでも任せておけば良いのです。サクラ、貴女は貴女の家庭的な魅力をもっと武器にすればいい。キャスターも言っていたでしょう、魔術と生活とは本来峻別すべき

モノ。魔術師ではなく女性としての顔こそ、シロウには一番の宝具になるかと」
「どどどどうしてここで先輩の名前が出てくるのライダー！　って言うかなんでキャスターさんとの会話を知ってるのー！」
「私は貴女の影ですから」
突然話の方向を変えられて慌てふためく桜。
その笑顔に済ました冗談を込めるライダー。
サーヴァントはマスターに近い在り方の英霊が喚ばれるという。常に自分の真横に昏い奈落の面が口を開けている彼女らにとって、光の側の何気ない会話こそが、大切な幸福の欠片なのだ。
――一際大きな阿鼻叫喚の渦が巻き起こる。振り仰げば山頂の更に裏手、世界の崩落が臓物墓場に及んだのか。さながらハーメルンに踊らされた鼠のように、無限の獣どもが途切れることなく螺旋を描き、天の逆月に飲み込まれていく。

黒い渦は次第に半径を増し、やがて山全体を飲み込んでゆく。
その不吉な様が忌まわしい記憶を蘇らせたのか、ライダーは石段を背に桜の方へと向き直る。
「サクラ、キャスターの言葉は本当に正しい。貴女はもはや魔導を追う系譜にはない。自分の闇と戦うために力をつけるのは正しいことですが、より重要なのは負に近づく境界を極力越えないことです。――私には、それができなかった」
手を取り合った姉たちの姿を思い浮かべながら、明日には消える記憶と知りつつも、自分に近い存在たるサクラに言葉を残す。
奇しくも、アーチャーと同じように。
あるいは、必然として。英霊という存在が固執するのは現世に在らず、果たせなかった未練に他ならないのだから。
「でも――でも、それじゃ先輩の道から離れてしまう。先輩は明日からもきっと戦うことをやめないから、だから――」
その道を追う力を捨てることはできない――そう言い掛けた桜を、ライダーは再び制止する。
「むしろ逆です。二人の魔術師が同じ道を歩むことなどできない。そこには互いを排除する道しかないのです。……キャスターもかつてそこだけは誤った。彼を追うのなら、二人ともが人間側の道を歩むしかないのです」
「でも、それは」
矛盾する世界が終焉を迎えるにつれ、桜の中からも平行した過去の記憶が消えてゆく。でも、ライダーの言葉に素直には頷けない。何故なら彼女の想う相手は、片腕を失っても止まらないような少年だったような気がするのだ――
「サクラ、決して間違えないように。その道が平坦なわけではなく、魔術師側の道は交わることすらない、というだけです」
英雄と魔術師の道に大差はない。それは他者を過剰に消費することでしか成立せず、いつしか他者に消費されて消滅する、魔の循環なのだ。
「相手がシロウならばむしろそれは茨の道でしょう。ですが、決して交わらないわけではない。私は勝算の無い戦いなど薦めませんから」
あくまで真顔で、戦術でも告げるように。
それは色恋だけの問題ではない。彼女らのような在り方の存在にとって、それは人生を左右する決断となるのだから。
桜もその重みを悟ったのか、言うべき言葉を探しあぐねて俯いた。だがそれは不快なものではなく、ただ純粋に、その真摯な助言に報いる言葉が見つからないだけだった。
――黒い渦が迫る。桜の記憶は次々と統合されてゆき、ライダーの存在は希薄となってゆく。

やがて桜は最後の刻を以って、胸の内の想いを言葉に換え、一息に紡ぎ出した。
「ライダー、何故そこまで心配してくれるの？……わたしはマスターとして貴女に何もしてあげられなかった。貴女を召喚したのもお爺さまの言いなりだったし、戦いはほとんど兄さんに預けたままだった。聖杯にも興味が無くて、おまけに貴女の願いのことなんてちっとも考えたこともなかった。なのに、どうして……」
時間は無い。刻限は近い。そしていずれにせよ、忘れられる言葉に過ぎない。だが、それでも。
ライダーが驚きの表情を浮かべたのは一瞬。
彼女は端的に、桜の疑問に答えた。
「私はサクラが好きですから。貴女が何をしたかではなく、ただ貴女の在り方が好きだった」
無条件の告白。それは、桜がその人生において一度たりとも向けられたことの無い言葉だった。

「それは恐らくシロウも同じですから、安心して行けば良いかと。まあ、根拠は無いのですが」
ライダーは最後に笑顔を浮かべ、初めてそんな曖昧な台詞を残し――
割散する渦の暴風が彼女たちを呑み込んだ。
やがて辺りの世界が剥落しきった時、そこにもはや騎兵の姿はなく、桜もこの場に立っているべき理由を失っていた。
「あれ、何でわたし柳洞寺に……？」
桜は首を傾げ、とりあえずとばかりに間桐邸への道を歩き出す。……こんなにも寒い十月の夜に、不思議にも、何処か温かい心（ゆめ）を抱えたまま。

瞬間、ソラが砕けた。
キャスターは予想されていた刻限を悟り、神言詠唱を直ちに停止させる。彼女が柳洞寺に蓄えている莫大な魔力も、所詮は偽りの聖杯（ヘブンズフォール）によって支えられているに過ぎない。大元が壊れてしまえば、一瞬毎に事象に変換される彼女の神言はモノの数秒で蓄えた魔力を使い果たしてしまう。
故に、ほぼ全ての絡繰（カラクリ）を知る彼女は、一切の魔力を無駄にしなかった。……何故なら、その魔力はこの夢のような時間を、一秒でも長く伸ばすための動力源に他ならないのだから。
キャスターは錫杖を軽く振るってローブの内側へと格納し、マスターと門番の待つ山門へと降下する。そのほんの僅かな滞空の間、彼女は見慣れた深山町を改めて見下ろした。
骸の大軍により赤黒く染まっていた街は一面の闇に還っている。黒い獣は冬木市の欠片を巻き込みながら、一体ずつソラへと堕ちてゆく。
剥離していく空間の下からは、久しく絶えていた平穏な街の灯りが見え始める。空が吸い上げられる獣の群れで黒く沈んでいるのに対し、それはまるで地表に散りばめられた星々のよう。ここに天地は逆転し、彼女は星空の下へと翔んでゆく。
「無事ですか、マスター」
山門に降り立った彼女は、真っ先に葛木の無事を確認する。もっとも、このような雑多な獣を相手に、彼とその護衛が苦戦するとは彼女も思っておらず、この発言はただひたすら葛木に声を掛けたいが為の台詞だった。
「問題ない。終わったのか、キャスター」
葛木は居住まいを正し、山門より麓を眺め下ろしながら彼女に問う。キャスターではなく山門に目をやるのは無関心の故ではなく、不意の脅威に備え、地上に降り立った連れを護らんとする意志の表れだった。
「――はは、これは将（まさ）に特異な夜よの。どうだ宗一郎、忠というのもなかなか悪くはなかろう？」

稀なる肴を得たかの如く、アサシンは哄笑して今宵を愛でる。キャスターといい葛木といい、歪の終幕に相応しい演目だったと言わんばかりに。
「この期に及んで悔いを残しても仕方あるまい。……だが、それも終わりなのだな」
葛木は表情を崩すことなくそう呟き、ようやくキャスターの方へと振り返る。
一方アサシンは直ぐに笑いを収め、肩をすくめてキャスターに告げた。
「さて、この身は一足先に消えるとしよう。僅か四日の退屈の後にこのような出物が得られたのだ。――さて、幾度四日を過ごしたかは分からぬが、これ以上の野暮はいたすまい」
野暮とは何か。彼女もそんな質問をする野暮はせず、見透かしたようなアサシンの台詞を睨みつけつつも、片手を振って彼をあしらう。
「殊勝な心掛けね。元々今回の貴方の役所には無理があった。歪みが粛清されるのも私たちより早いでしょうから、さっさと周りを巻き込まないうちに還りなさい」
「ふむ、心得た。まったく隣であのような忠義を見せられてはな、私もせいぜい主に忠を尽くさずにはおられまいよ」
皮肉を後に、さりとて彼女の怒号を待たずして。侍はあくまで涼やかに、己が存在を自ら堕天へと掻き消した。
その様を静かに眺めていた葛木は、
「キャスター、おまえはどうなのだ。この戦いは、おまえの望むものであったのか」
そう、あくまで彼女の意志を確認した。
「宗一郎様――」
無論、望みといえば嘘になる。叶うならば、永劫この黄金の日々を回していたかった。天の逆月に手を伸ばし、絡繰を弄ることで世界の延命を図ろうと考えたことすらあった。
だが、舞台裏を知ってしまったキャスターは衛宮士郎と同じく、繰り返される隣の日々が見えてしまう。既視感の積み重ねはやがて、黄金の日々から輝きを奪ってゆく。
「私は――私はただ、貴方と」
それでも、続けたかった。
彼女は無垢な少年たちとは違う。世界の隙間が埋まり、何一つ新しいコトが起きなくなろうとも、明日に裏切られないという一点において、この世界は永劫慈しむべきモノだったのだ。
だが、それを伝えるのは怖い。
何故ならこの世界には過去が無く、そして宗一郎も衛宮士郎と同じく、積み重ねてきた償いを捨てることを許さない。
主の信念に反する望みを持ち続ける背徳。それがこの黄金の日々に、常に刺さり続けた一本の棘だった。
……だが、それも今宵で終わる。悔いを残すなと宗一郎は言った。ならば、彼女ももはや失うことを恐れず、全てを口にすべきではないか。
「――宗一郎様、私の望みなど元より一つしかありません。私の望みも、私の帰るべき場所も、それはいつだってたった一つ……！」
そこまで言うとキャスターは俯き、知らずその瞳から涙を零す。
その雫はかつて、冷たい雨の中で葛木が感じた温かい何か。自分が唯一悲しみを覚え、自分が還すべきと感じた、その誰かが「自分の為」に流した涙ではなかったか。
「……そうか、キャスター、おまえは」
蛇と呼ばれ、玄翁と畏怖された左手を、彼は目の前の女の頬に伸ばす。血塗れてない何かをその手にすることなど、滅多にあり得ることではない。

手のひらに染みる何か。最期まで自分の為に泣き、飛び立つことの無かった美しい鳥。

「そうです、全てはここにありました。……いえ、ここなどではない、私の願いの全ては、貴方そのものでした。あの日、貴方にこの血塗れた手を取ってもらえた何よりの奇跡を、私はずっと守っていたかった――――」

稀代の魔女は泣き叫ぶように、自身の指では起こせなかった奇跡を愛しむ。そう、今この瞬間に彼女は気がついた。彼女の一番の望みは、この日々を無限に繰り返すことなどではない。守りきれなかったその奇跡(マスター)を、留めおきたいという未練であったのだ。

それは彼女が魔女である以上、決して叶わぬ夢。純粋に人を救うという、如何なる魔術を以ってしても届かぬ奇跡の領域。

だが、キャスターはこの時まで知らなかった。

宗一郎はあくまで静かに瞑目し、己が心の内を覗き込む。漠然と抱き続けてきた純粋な憧れの座に、一人の女が座っていることを確かめた。

「――――そうか、ならば私は」

そう、彼女は最期にただ一度だけ、

「誰(おまえ)かの為に、なれたのだな」

確かに、一人の人間を救ったのだ。

かくて鐘は鳴り終え、聖杯戦争は幕を閉じる。世界は新たな輝きを取り戻し、勝者と生者は残り、死者は還るべき場所へと消えてゆく。

ただ一つ、最後の別れを残して。

3: "world without end, Amen."

December, 2003

そして、静かになった。

柳洞寺地下の大空洞、始まりの祭壇。大聖杯と呼ばれ、二百年にわたる聖杯戦争という大儀礼を司ってきた巨大な魔法陣。

戦争時には空洞全体が膨大な魔力で溢れ返るのだろうけど、休眠期である今は乾いたまま、魔法陣の放つ淡い光が照らす静かな空間である。

――円冠回廊、心臓世界テンノサカズキ(ヘブンズフィール)。

クレーターの内側に刻まれた美しい幾何学模様の中心に、全てを始めたユスティーツァが、全てを始めた時から変わることなく、直立したまま静かに眠っている。

冬の聖女、リズライヒ・ユスティーツァ・フォン・アインツベルン。イリヤにそっくりのその姿は、冬という形容詞がぴったりの、静かな冷たい表情を保っている。……とても、ついさっきまで防衛迎撃システムとしてムチャクチャな大魔術を

ぶっ放し、静かどころではない騒ぎを巻き起こしていた存在とは思えない。
もちろん、それすら彼女（リズライヒ）にとっては無意識の御技であり、責めるべきは彼女ではない。
「なんとか辿り着いたな。流石に本体の近くまで来ちまえば作動はしないのか。……なあ、そんなに危険はない、とか言ってたのは何処の誰だよ」
と、赤い何処かの誰かに向かってぼやく。
「バゼットが咄嗟に気づかなきゃ危うく全員消し炭になってるとこだったぞ」
螺旋を描く幾何学模様に複数の魔術回路所有者が触れることが、防衛システム発動の条件だったらしい。大聖杯を調査していたのは遠坂とイリヤだけど、アインツベルンの血を引くイリヤは検出対象外だったために気づかなかったようだ。
「う、うるさいわね、全員生きて辿り着けたんだからいいじゃない。大体対価もなしに大聖杯が解呪できるだなんて甘い考えでいる方が悪いのよ」
と抗弁する遠坂だが、
「オブザーバーに対価など要求しません、と言ってたのも何処の何方だったかしら。調査役が大聖杯で死んだなどと伝われば、聖堂のあの方たちが嬉々として乗り込んでくるわ」
「まったくです。今の私たちがここで消えでもすれば、遠坂のお取り潰しはもちろん、時計塔と教会がこの地で代理戦争をやらかしかねません」
カレンとバゼットに即座に切り捨てられた。普段は反目してるこの二人だけど、遠坂に対しては急に連携して最強の守り手ぶりを発揮する。
ちなみにバゼットは協会復帰以来久しぶりの来日だけど、調子は相変わらずのようである。
「えーっと、そ、その辺にしてあげてくださいカレンさんバゼットさん。姉さんはその、そう、ちょっと余裕綽々に振舞ってみせるのが好きなだけ

なんですっ！」
桜のフォローは、聞きようによっては前の二人よりもえげつない気がするのは気のせいか。
哀れなるかな遠坂凛。この大聖杯解呪の最大の立役者の一人であるはずなのに、いきなり酷い言われようである。ま、あんまり同情できないんだけどな。死にかけたし。
いずれにせよ、役者は揃った。
始まりの三家の裔（すえ）たる、イリヤ、遠坂、桜。
聖杯戦争の現勝者権限所有者（らしい）俺。
加えて立会人（オブザーバー）として、監督役司祭代行のカレンと封印機関代表のバゼットが同行している。
「……これでもう終わりね」
とイリヤが少し寂しそうに小さく呟く。
無理もない。聖杯を汚染した泥の誕生を防ぐために、本家に背いてまで大聖杯の破壊に協力してくれたイリヤ。だが、彼女とて一度はアインツベルンの悲願として聖杯に挑んだのだ。複雑な思い無しには、汚染がなければ辿り着けたかもしれない儀礼を破壊などできはしまい。
「ああ、終わりにしよう。この聖杯はもう誰の望みも叶えられない。切嗣（オヤジ）が望み、セイバーと誓った終わりを――いいんだな、三人とも」
アインツベルンの千年、マキリの五百年、トオサカの二百年。第三法を求め、この世全ての悪の廃絶に命を掛けて始まった大儀礼は、やがて極大の呪いの揺籃となり果て、今日ここに崩壊する。
もはや言うべき言葉はない、と。イリヤ、遠坂、桜はそれぞれ魔術師の貌（かお）で頷いた。
昨夏ヴェネツィアから持ち帰った概念礼装、ただ聖杯を破却する願いのみを結晶化した聖剣アルトリアを振りかざす。
迷いはない。全ての終わりをここに。
――だが一瞬、自らの兄弟を手に掛けているか

のような錯覚に捕らわれる。
ユスティーツァの上空で、半霊半肉の状態で浮かぶ呪いのサーヴァント。閉ざされた大聖杯の内側で静かに眠る、この世全ての悪の名を冠された復讐者。……その憎むべき存在に、何故俺は一瞬親近感など覚えたのだろう。
否、錯覚自体も錯覚だ。振り払うべき迷いなどあるはずもなく、俺は直ちに聖剣を振り下ろす。
――その俺の一挙一動を、誰よりも真剣に見守るバゼットの視線を感じながら。
聖杯の中心に、エクスカリバーにも似た光が立ち上る。ユスティーツァが、幾何学模様が、受肉した呪いが、全てが光の渦に飲み込まれてゆく。
「アンリ――――」
バゼットが何かを呟く。アンリマユ、だろうか。
……それは俺の耳には何故か、ひどく親愛な響きに聞こえていた。

―・―・―・―

ようやく出会えた、というのがバゼットの最初の思いだった。
あの虚ろな日々から一年余り。大元たる大聖杯を破却するという冬木の魔術師たちへの同行を申し出たのは、封印機関の任務という以上に、彼の根源をこの目にしたかったからに他ならない。
無論、あれはカレではない。聖杯の中に巣食う闇は彼女の願いを叶えた存在ではなく、言峰の願いとして生まれようとしたモノに過ぎない。
だが一方でそれは紛れもなく、かつて人類の悪心を一手に引き受け、人類への復讐を機能として刻まれた、一人の青年の果てでもあった。

――光の渦に、アンリマユが消えてゆく。
その光景を前に、思わず声があがった。
「アンリ――――」
知らず、バゼットは消え行く影に問い掛ける。
「私は――生きている。今でも呼吸をするのは辛いけど、それでも生きている。貴方は正しかったのか、答えはまだ見えないけど」
ただ、あの時の言葉に荷物を預けるのではなく、自分に還る貨幣の重みの上に、貴方の言葉を感じようと思ったのだ。
「だから、自分の為に足掻いてみてる。相変わらず無様で、苦しくて、未だに誇りなんて感じられないけど、だけど――だけど私には」
貴方にはなかった希望がある。
終わりのない日々では全てを繰り返すことしかできなかったけど、続いてゆくこの世界なら、例え失敗してもまた明日がある。
例え呼吸が厳しくても、生きている限り未来と戦わなきゃいけなくても、そのまた明日さえあれば、その明日に絶望さえしなければ、またやり直すことができるのだ。
さあ続けようと彼は言った。自分自身は続けることも、未来も、自分の為にできるただ一つのことも持たなかった一人の青年が、それこそが希望なのだと聖杯の底で口にした。
それが今、光の中に消えようとしている。
――多分、彼は見当違いと言うだろう。
憐憫や同情ではダメだ、とも言っていた。
「それでも、私は、貴方を――――」
救いたかった。
今なら同情ではないと言い切れる。
回り続ける平凡な日々は楽しかった。

ならば、それこそが共有したかった楽しみ、誰かを救いたいと願うに足る理由だったのだと気付いたのだから。

――いつしか光の渦は収斂して空洞の偽天を突く柱となり、やがて細く細く薄れてゆく。

大聖杯を形作っていた事象が消滅し、虚無は伝えるべき流転を失うのだ。

（さあ、戦争を終わらそうぜバゼット。

こんなモノに、アンタの望みは――――）

空耳が聞こえる。

無意識のうちに、手の中に一欠片のパズルピースを握り締める。彼女は中空の光に目を細め、言うべき言葉を探して口を開く。

「あ――――」

だが、ここにはもう彼はいない。黄金の日々は遠く、別離の言葉はいつだって間に合わない。

ならば、せめてもの想いを――――

「――明日（みらい）をありがとう、私の復讐者（ディア・アヴェンジャー）」

感謝の言葉を、カタチにしよう。

――乱舞する最後の煌きが一瞬、隣に立つ少年の身体に複雑な陰影を落とす。だが、彼女はもう見誤らない。何故なら彼はもうおらず、彼女は意地でも明日を生きていくのだから。

第五次聖杯戦争終結から二年。

歪んだ聖杯の登場から六十余年。

永きに及んだ聖杯の復讐（アヴェンジ・ウォーズ）は、ここに終結する。

やがてバゼットは踵を返し、

昂然と胸を張って大聖杯の跡から歩み去る。

そしてもう二度と、振り返ることはなかった。

――THE WORLD STILL GOES ON.

ではavengeも自己の報復の為に使われてますが、一応大義名分があるのが前提です。なお日本語の訳語は半分本当半分適当といったところ（一応復讐には「仇討ち」という意味があり、報復にはないので）。またそこから「avenger→正義の味方」に捻り出したのは、如星オリジナル解釈だと思ってくださいませ。しかし、奈須御大はこの辺まで考えて「アヴェンジャー」の呼称をつけたのかしら……。御大の寓意は複雑に絡み合っていて、余人の推測しうるところではないですねぇ。オソロシス。

【カバーデザインについて】

今回のカバーに使われているステンドグラスは実在の物をベースに若干の手を加えた物です。オリジナルはイタリアはフィレンツェ、聖マリア・ノヴェッラ教会の巨大なステンドグラス。私がイタリアで見た中でも一二を争う見事さで、またこのグラスを抜けた光が、濃緑と白を基調とした大理石の床に色とりどりの斑を描く様が実に美しい。如星の愛するヴェネツィアの教会とはまた違った壮麗さがありますね。なおフィレンツェ周辺のトスカーナ地方は修道院も多く、案外カレンの所属もこの辺りかもしれません（笑）。

またサンタ・マリア・ノヴェッラという名前は、昨今であれば日本でもフレグランス、化粧品ブランドとして耳にされた方もいらっしゃるかと思います。文字通りこの教会付属の歴史ある薬局が展開しているブランドで、かく言う如星もここのルームフレグランスや石鹸の愛用者だったりします。この本もノヴェッラのサンダーロ（白檀）の香りの中で生まれたようなものです。石鹸はともかくフレグランスは随分長持ちする量ですので、決して安いモノではありませんが一度お試しあれ。

さて、次回作がどうなるかはまったく不明ですが、これだけ魅力的なアンリやバゼットを一回で終わらせてしまうのはもったいない気がしていたり。一方で少々奈須節に限界を感じてもいるのですが、はてさて。

最後に、毎度絶望的なスケジュールの中、校正に付き合ってくれたP女史とF氏、垂れ流される愚痴を聞いてくださった某IRCルキチャネルの皆様に心からの感謝を捧げつつ。

それでは、またいつか何処かで。Slán leat!（スローン リャット）

2005 冬 維如星 拝

あとがき：Hollow/regret night

お疲れ様でした。以上、お相手は維如星にて。"Hollow/avenge night"をお届けいたしました。Hollowの発売から一ヵ月半、如星としてはかなり駆け足のプレイ・読み込みでしたが、何とか自分なりの「ホロウ感」をお届けできたかと思います。長い台詞が続くわアクションはないわと、書き上がってみればなんとも重い作品になってしまったのですが、まぁこれも一つの如星節として、このような傾向を好んでくださる読者様がいらっしゃることを切に願う次第です。

今回、新キャラのバゼットやアンリはもちろんのこと、結果的に桜やライダー、キャスターに葛木まで、初めて動かすキャラが四人も増える結果になりました。果たして皆様の目に自然に動いているでしょうか。正直、ライダーはちょっと間違えるとバゼットさんになってしまうのが結構難しいところでした。……本質的に、在り方が似てるかも。

また士郎とアンリの対談は、今回最大のフィクションですね。ホロウの士郎は決して偽者ではなく、むしろ鏡像存在であっただろうというのが、そもそも本書の生まれた基本でした。なお「avenge」の意味については後述。

【のっけからごめんなさい】

本書の執筆中になんと左手が腱鞘炎になってしまい、執筆速度が激減するというトラブルに見舞われました。一番書きたかった部分は何とか完成したのですが、本来本書は「プロローグ」側も後半と同じボリュームがある予定だったのです。……ええ、緊張と嘆息の七日間、特にキャスターとの前哨戦が描かれる予定だったのですが、これを泣く泣く断念。先走るダメットさん、彼女の殻を解いていくランサー、その過程でアサシンを召喚するキャスターなどを書いてみたかったのですが……無念。何処かでこのプロットはサルベージしてあげたいです。

【ちょっとした補足解説】

- 聖剣アルトリア：前作「estate dolce」をお読みください（ぇー）。……お持ちでない方向けに一応解説。聖杯を求めた伝説の英霊アーサー王ではなく、聖杯を二度破壊した「英霊アルトリア」の意志を結晶化させた概念礼装。聖杯の破却にのみ特化している。ヴェネツィアの封印機関タラマスカの協力の下、士郎自体を媒介とした降霊儀式で錬成。ちなみに前作では名前がついてなかったり。
- 復讐と報復：英語のavengeとrevengeの違い、語源は本当です。現在

Qui missus es sanare contritos corde: Kyrie eleison. Qui peccatores vocare venisti: Christe eleison. Qui ad dexteram Patris sedes, ad interpellandum pro nobis: Kyrie eleison.
Kyrie eleison.Misereatur nostri omnipotens Deus et, dimissis peccatis nostris, perducat nos ad vitam aeternam. Amen.

Hollow/avenge night

tonight, let us end our avenge. tonight, let us avenge, hollow ataraxia.

初版：2005 年 12 月 30 日

著者：維如星

発行：神慮の機械
http://luxin.blackcats.jp/

カバー印刷：関西美術印刷株式会社
本文印刷：株式会社ポプルス

一次創作：TYPE-MOON「Fate/hollow ataraxia」他

本作品の無断転用、複製を禁じます。

乱丁・落丁本はお取替えいたします。
上記 URL よりご連絡ください。